

## 家族と地域社会のイロニーと地域ケア —町田その子『52ヘルツのクジラ』を通して—

古 川 隆 司

An Irony for the families and communities against the Community care - consideration for Sonoko Machida  
“52 Herutsu no Kujira”

Takashi FURUKAWA

### 要 旨

親から愛されなかった経験を共有する女性と少年がさまざまな理解者による支えを通して変化していく作品を手がかりに，本論は近年地域社会で官民の取り組むさまざまな支援活動と日常性について批判的な考察を試みる。これら活動が対象とするのは，作中で主人公らの私事化される苦しさの経験である。物語でこの苦しみは，理解者との対話と関わり合いに包摂していき，支援活動に対象化されない。たとえば主人公の苦しみは，さまざまな福祉法制度の対象であっても，物語はこれが類型化され分類されることを拒む。しかし親友との再会と対話をきっかけに，主人公自らが語り，かつ親友ともう一人の主人公に共有されることにより昇華される。同時に，もう一人の主人公の苦しみにも展望を見つけていくのである。

本作品を支援活動に対するイロニーとして考えるとき，日常性の尊重を標榜する専門的な支援は，主人公たちの日常における苦しみに対して，方策を示したとしてもその手段的意図の故に捉えがたいであろう。逆にそのことが，日常における苦しみへ向かい合う営みの重要性を提示するのである。

キーワード：語られない苦しみ，苦しさの共有，包摂，相談支援システム

## はじめに

### 0-1 問題の所在

近年深刻化する社会的に孤立したひとびとの生活課題は、公的な相談機関だけでなく民間による相談事業が対応し、その実情が情報発信されることが増えた。ところで、公的な相談機関を規定する社会福祉の立法は、対象となる人びとや生活課題を具体的に定義し、対応するケアサービス等事業とその利用手続などを定める。これにより具体的な個々の対応がおこなえることとされた。一方、同時に当該事案を発見し、相談事業へ通報するよう学校・職場や地域住民へ義務付けた<sup>(1)</sup>。いいかえればこれら専門的な相談事業は、整備されてもこれらにつなげる協力なしには成り立たないことを意味する。この結果、地域子育て支援、高齢者の地域包括支援、障害者の生活支援など相談支援のネットワーク化が進められた<sup>(2)</sup>。このなかで住民参加が進むと同時に、市民活動としての相談活動に取り組む動きも広がっていく。

ところで対策とは、システムが整備できれば解決され結果が出るものでない。むしろ重要なことを見落としてしまうおそれに留意するべきである。すなわち、これら地域相談支援システムの枠組みは、要援護状態にあるか、またはそのおそれがある状態におかれた人びとを対象化するなど、要援護状態を基準にして、これまで対応した人びとを類型化したステレオタイプを形成し、住民を判断する。すると「そうでない人びと」が視野に入らなくなる。コロナ禍で、生活困窮に陥った一般の人びとが初めて相談窓口を訪れるようになったがこれは、必ずしも地域相談支援システムが充実したからでない。相談窓口を担当する相談員たちにとってこれらの人びとが訪れたことへ驚きがあったとしたら、「そうでない人びと」が支援を要する状態に陥ったこととして受け止めていたからである<sup>(3)</sup>。

### 0-2 生活課題と日常生活の苦しみ

だが、より深刻な見落としは、ステレオタイプに該当するが相談につながれば支援できる人びとがいるという性急な認識のもと、同時に家族関係のような日常生活のなかで誰にも語ることでできない苦しみや痛みがあることである。

相談支援体制は、相談という機会で表明される苦しみを前提に成り立つが、誰にも語られないような日常生活における苦しみはそもそも対象化が難しく制度的な対応が難しい。また制度化の普及によって、これらの苦しみや痛みの存在やそれを理解しようとする営みも、支援者自身が損なってしまうおそれもある。すると外見では分からないような内面化された苦しみは、語られないために遠景化されるだろう。だがこれは、相談支援体制に限ったことでなく、支援側だけでなく、他者へ善意をもって助けたいと思う私たちにも重なるかもしれない。

また、語られない苦しみに対する態度は、文化的背景を含めてそれぞれの社会で異なり、専門職の支援モデルのように一般化することは難しい<sup>(4)</sup>。だが、社会生活において生じるその苦しみ

と、そのような「語られない苦しみがある」と認識するとしたら、私たちはこれとどう向かい合うべきか。

### 0-3 本論の方法と目的

以上の問題意識にたつとき、語られない苦しみとは、単なる支援モデルの反省的考察の手がかりと考える以上に、より本質的な問いを投げかける。というのは、少なくとも地域相談システムを含む対人援助は、生活上の苦しみについて当事者が語ることやこれを「発見」した人びとによる言語化によって支援の対象とするのだが、語られない苦しみはこの前提を崩すからである。そこで本論では、語られない苦しみについて、文芸作品を通して地域相談支援システムでは掬い取られないことを確かめ、これに対する社会的な向かい合い方の考察を試みたい。

文芸作品を用いたアプローチと考察については、以前拙稿（2009）で論じたのでここでは繰り返さない。ただし、文芸作品というメディアで言語化されること自体への考察は、本作品全体を振り返ったうえで検討を加えたい。

## 1. 作品における登場人物たちの経験

### 1-1 本作品の概要

作品は、主人公である貴湖が、亡くなった祖母が一人で暮らす一軒家での生活から始まる。海に見えるこの家で貴湖は、仕事もしておらず携帯電話も持たず、近所での買い物をしながら、徐々に地元の人と関わりをもっていく。

ある日、貴湖の家に雨宿りしていた少年の世話をする。かれは話しかけてもしゃべらず、濡れた衣類を着替えさせる時、虐待でつけられたであろう傷をみつけるが、かれはいなくなってしまう。貴湖は、かれを助けたいという思いを抱く。再び少年が訪ねてくれた時、貴湖はかれにタブレットの操作法を教えて動画の視聴を薦める。その中から、少年が偶然見つけた52ヘルツで届くというクジラの声を紹介し、自分も気持ちを落ち着けることができるのだと少年に語り、かれもそれに聴き入る。筆談でかれとやりとりしながら貴湖は、自分のあだ名がキナコであること、名乗ろうとしないかれを52という呼び名で呼び合うこととなる。

地元のつながりから知ったのは、かれが元校長の娘が生んだ子で、母やその家族から「ムシ」と呼ばれていること、また地元の老人会会長も務める元校長は娘を溺愛して、少年が虐待されていることを知らないということだった。そして、筆談をとおしてかれの状況を知り、体に虐待の傷が残るかれをほうっておけない貴湖は、その後52の母親と話してかれを保護する。そこへ、高校時代からの親友の美晴が突然訪ねてくる。親との関係に閉じ込められていた貴湖を救い出してくれたのは彼女と、彼女の仕事仲間であるアンさんだった。貴湖は、52を助けるために動き出し、美晴と52とともにかれが幼少期に住んでいたという街に向かう。そこで52を知る老女と出会い、

老女を通して52の祖母と会うことができた。

その途上、貴湖は美晴との対話の中で、52は貴湖や周囲の人との対話の中で、それぞれが自らの過去と向かい合い、互いのこれからを確かめていく。

### 1-2 語られない痛みとしての経験

本作品は主人公である貴湖の語り手となって進められていく。したがって、貴湖が経験する一軒家の生活を送りながら、折々に回想される自らの過去と行ったり来たりする。その中で、貴湖が、仕事もやめ親友の美晴とも連絡を絶ち、携帯電話を解約してまでもかつて祖母の住んでいた海の見える一軒家に移り住んだ理由が徐々に明らかにされる。これは貴湖や52の経験が、おもに貴湖によって語られていくのだが、「誰にも相談できない」あるいは「誰にも話したくない」ものとして痛みが示されていく。

その一つは愛されたい相手との関係である。貴湖は、愛されなかったのは母親との関係を繰り返し物語る。母親との関係は少しずつ変化していくが、再婚して新しい父親からの関係の変化、新たに異父きょうだいが生まれて以降変化した母の態度、義父が病気を発症してその介護を命じた母との関係は、自覚できない程に貴湖を追い詰めていた。

それが大きく変わったのは、親友の美晴との再会とアンさんの関わりであった。ここから貴湖が自らの人生を歩み直していく一方、更なる人生の転機をもたらす二人との関わりを経験する。一人は仕事先で出会い恋愛に陥っていく会社の御曹司主税である。貴湖はやがて主税が婚約相手がいながら自分と付き合っていることを知る。もう一人は彼女が知る前に主税との関係を貴湖へ教えたアンさんである。アンさんと主税との別れが、誰とも連絡を絶った貴湖が海辺で一人暮らしを始めるきっかけとなっていく。

### 1-3 相互の関心

貴湖と関わるそれぞれの人物は、各々が互いへの関心を寄せあったり、途絶えたりする。関係の途切れに注目すると、貴湖の生き方は何度も途絶えつつ、これまでとの関係を取り結び直したり、新しい関係を作ったりする。貴湖にとって底流の関係とは母親との関係であり、何度も痛みのある思い出を繰り返し続ける。

偶然出会った「ムシ」と呼ばれる少年は、貴湖のかかわりに当初戸惑いながら、徐々に52と呼び名を与えられ、一緒に食事をし、筆談で少しずつ語り始めるが、語れないこと・語らないことは文字にできない。だが貴湖に対する52の関心は、徐々にかれ自身を救いたいという貴湖の思いに応えるように変わっていく。

街角で貴湖が再会した高校時代の親友だった美晴は、黙って去った貴湖をさがしその後海の見える家を訪ね、貴湖が過去へ向かい合いながら52を救おうとする気持ちを後押しする。また、貴湖を親元から独立させる後押しをしたアンさんとの関係は、職場での恋に至った貴湖や美晴と離

れ、その後貴湖の生き方を大きく変えていく。これらの関係の軌跡は、それぞれが拒否し合わず互いが受け入れるような状態になっていくときに結び直されていく。

海に見える家の修理を頼んでから知り合いになった地元の村中は、その後何か用を作っては貴湖の家を訪ねるようになる。彼女のなにかを詮索しようとするのではなく、ただ気になるという動機の村中は、貴湖にとって受け入れられるような接し方である。その後貴湖や52の歩みに対して、地元からみればよそ者の貴湖たちと地元の人びとをつなぐ役割を担っていく。

貴湖と彼女をめぐる人びとの関心は、いずれもかれらにとって「何となく気になる」という動機にもとづいていて、決して強制性は感じさせない。また型にはまった関わりでもなく、仕事や学校といったものに規定されるような機能的な関係でもない。それぞれが相手の気持ちの向くところまで待つような態度に表されている。

## 2. 「語られない痛み」と他者との関係

### 2-1 親から受け入れられない痛み

親から受け入れられない痛みは、物語の終盤で貴湖が吐露する「ほめられたかった」という言葉に集約されているのかもしれない。それは、自分なりに努力するのだが、たとえば時に母親の態度を一変させ、振り回され振出しに戻る繰り返しだったのかもしれない。作中、小学校の担任が服にアイロンをかけてあげてほしいと母親へ連絡したとき、貴湖はよいことを担任へしゃべったのだと決めつけられ、罰を受けたという思い出が語られる。愛されたいから、自分で頑張っているのに、何もわかっていない担任が良かれと思って勝手なことをしたために台無しになった経験に、貴湖は相手を恨むことで処理できない。それ以上に、貴湖は母親から受け入れてほしいという気持ちを、受け入れようとしない母親へ向けつづけるのである。貴湖にとって、母親との関係のほうの方が大事であり続けるのだろう。

このような思いは、もしも同じように親が再婚した友達に話したとしたら理解されるだろうか。それは、それぞれの親や新しく親になった人との関係でそれぞれ異なっていて、貴湖の気持ちを理解できるとは限らない。また、第三者が貴湖のそんな気持ちを洞察できたとしても。けれど第三者の介入によってそれを満たすことはできず、貴湖は受け入れられたいと思う気持ちが残る限り、繰り返しその思い続けることになる。

### 2-2 大切な存在を喪う痛み

貴湖にとってアンさんを喪ったこと、そしてその喪い方は、自分が原因だという念が拭えず、たえがたいものだった。貴湖が一人で海に見える家に移り住んだ理由となるが、貴湖を案じて訪ねてきた美晴との対話によってようやく言葉にされていく。

一方52にとって、生まれた街を貴湖らと訪ね、ようやくかれとかれの家族を知る隣人の老女と

出会えたが、52の母はかれを虐待している。これを庇い、母に代わって育てた叔母とその母親は既に他界していた。ことばを話すのも遅かった52が最初に話したのは「ばあば」であり、母親でなかったと老女が語るとおり、52にとっての大切な存在とは母親でなく他界した叔母であった。

その後出会うことになったもう一人母方の祖母は、52の境遇とこれまでを受け止め、かれを連れてきた貴湖らに協力を申し出た。この祖母は、早い時期から祖父と離婚していたために接する機会はなかった。再婚した先で民生委員も務めている祖母やその再婚相手の男性は52のためにできることを積極的に準備してくれる。なお、作中で唯一社会的援護に関わる働きかけをするのは52の祖母夫婦だけである。この祖母は社会的には重要な存在ではあるが、けれども52にとって大切な存在とはならなかったし、祖母も52のこの思いを尊重する。

### 2-3 共通するもの

貴湖と52に共通するものは、母親がいるのに愛情を得られなかったという経験である。同時に、互いに身近な理解者の存在もあるが、かれらはいずれも大切な存在と理解者との別れを経験してきた。この経験を孤独と表現するならば、それを象徴するのは、他には聞き取れない「52ヘルツの鳴き声」で鳴くクジラの声であり、本作品の表題である。この鳴き声を聴く貴湖と52の心へ沁み入っていくように、大切な存在との別れに届くように位置づけられている。

もう一つ共通する経験は、重要な出会いと再会である。貴湖にとっての出会いはアンさんと52との出会い、52にとっては貴湖である。また再会は、高校時代の親友だった美晴との二度の再会、52にとっては昔住んだ街の隣人だった老女である。これら出会いや再会をかれらが自覚的に意味づけることは難しい。だがそれは、かれらと出会い再会した人びととの関わりをとおして意味づけを得ていくのである。

出会いや再会は、52ヘルツの鳴き声にまた別の意味づけも付与していく。すなわち、「誰にも聞き取れない」としてもそれは誰かに届く、という希望である。鳴き声に聞き入る52と貴湖には、その後の出会いや再会があったことで、鳴き声は誰かに届くのだという予言の自己成就として解釈されている。

### 2-4 経験の昇華

作品はその過程自体が貴湖と52の、語られない痛みが昇華されていく物語となっている。かれらの語られない痛みは、かれら自身が語れない状態として提示されているが、それを感じ取る人びとの意図的でない働きかけや関わりによって変化していく。また、かれらに向けられる周囲の態度は、痛みを抱えるかれらへ向けられたもので、痛みだけへ向けられない。それ故、貴湖や52自らが封じ込めていた痛みを開示するよう促されず、融かすように明らかにされていくといつてよい。それは、たとえば地元の男性である村中が「何となく気になって」といったように踏み込まないし、美晴のように貴湖に無理やり何があったのかを尋ねるのでもない。両者は、事情や内

面のつらさがあることを前提に、貴湖たちが自らの痛みを語る機会を待つ態度に徹している。

### 3. 考 察

#### 3-1 善意の地域住民と親密な存在との違い

ところで、もしも村中や美晴の態度が意図的で、痛みそのものへのアプローチを前提に関わっていたとしたら、貴湖はこれを受け入れることはなかっただろう。かれらの態度は、52や貴湖のように家族が帰属集団でない者にとって、貴湖らを程よい距離感で包む。貴湖が52を保護しようと決めた時も、かれらは決して52を束縛するのではなく、かれにとって危害も干渉も及ぼさない距離を保つ。同様に、アンさんも貴湖が親元から出ていくときに力を貸した以外は、貴湖が少しずつ自ら語ろうとする姿勢を受け止めている。

仮に、地域社会の助け合いにかかわる立場の者であれば、このような距離で貴湖たちと接することができるだろうか。おそらく、かれらも過剰な干渉をすることはしないとしても、何らかのきっかけを見つけて働きかけようとするであろう。その違いは、貴湖らの状況に対する理解にあると思われる。第一に、家族関係に対する規範意識が定まっていること、「望ましい」状況に向け働きかけようとする態度、これを規定する認識枠組みの有無だろう。このうち、貴湖にも村中や美晴にも、望ましい家族のあり方に対する認識枠組みは少なからずある。それゆえに貴湖は母親との関係で苦しみ、52を助けるべく村中は祖母に協力を求めたりする。

村中のこの態度に注目しよう。かれは、貴湖が移り住んだ町に生まれ育った人物で、地域社会の関係の複雑さや面倒見の良さも理解する、ごく平凡な存在である。だが、地域社会における支援や助け合いを担うのも、村中のような人物であり、善意の第三者として貴湖と52をとりまくインフォーマルな関係ととらえられる<sup>(5)</sup>。両者の違いは、貴湖らの痛みに対する関心と態度にある。

#### 3-2 道徳的感性における盲目性とメディア化

また、貴湖と52（あるいは美晴やアンさんを含めて）の語られない痛みがかれらの親との関係にあるが、地域社会で支援に携わる側から親との関係の捉えかたには、たとえば、フォークナーが「兵士の報酬」で主人公をとりまく人びとの対照的な態度がわかりやすいだろうか<sup>(6)</sup>。この対比について大橋は、フォークナーが「死や裏切りや誘惑や虚しさを究極的に贖い救う力」を模索していると評する（大橋、1993：53）が、これにあたる力は本作品で、貴湖らの語られない痛みについて彼女たちを尊重する価値を表明する態度という形で示されているだろう。

一方、地域社会で支援に携わろうとする側にあたる人びとはこの作品に現れてこない。したがって、痛みに対する態度として美晴や村中との対比として考えよう。支援に携わる側は、そのもつ認識枠組みによって貴湖と52の痛みを知ろうとする。知ろうとするために、かれらは痛みを言語化しようとするであろう。それは対人支援で尊重される個人の尊重と矛盾するような形になら

ざるを得ない。その矛盾とは、クライマンらが表現を用いれば、「痛みの非伝達性」<sup>(7)</sup>を社会的に取り扱おうとする時の道徳的感性における盲目性を支援側が自覚していないことといえる。

貴湖と52らに働きかけようとする地域支援に協力する側は、自らの目的にもとづいている。それは、貴湖らの語られない痛みを洞察しながら言語化させようとする働きかけでもある。親からの虐待やネグレクト・恋人からのDVなど社会的に対応すべき課題を解決しようとすることは、通報や相談という仕掛けを通した問題の解決である。そのとき、当事者の語られない痛みを社会的に対応すべき課題として言語化させることは、それ自体が他者の痛みを認知できないという政治的虐待の文化的プロセスである。故にこの矛盾は、ケアサービスという媒体を通した対策によって必然的とならざるを得ないだろう。

### 3-3 家族と地域社会へのイロニー

個人や家族の問題への社会的対処をすすめる政策目標として地域共生社会が掲げられ、福祉の事業や個人・民間団体の取り組みが広がる。地域相談支援システムの対象となる生活課題への高い社会的関心は、地域社会や近隣関係にいる人びとへの共感でもある。だが私事化されたそれぞれの家族や個人への介入はかれらとの関係を安定的に維持するために控えられる。そのもどかしさが、善意ある第三者にはある。故に個人や家族の問題への社会的関心とは、国の対応たる公助の不十分さへの批判の表れかもしれない。しかし、地方自治体がこれらの人びとを地域相談支援のシステム化によって「動員」すると、支援を要する人びとへの関わりが画一化されてしまう<sup>(8)</sup>。

以上を踏まえると、地域生活支援の対象となる経験を描く本作品のような文芸メディアについて、二つの捉え方ができるだろう。第一に、多くの人が共感し受け入れる作品であることは、それだけ読者にも主人公たちの語られない痛みが理解されていることの反映である。第二は、その痛みに対する物語は、支援システムを含むとしてもそれを唯一の解決とみなさないことである。本作品の世界において支援システムは遠景化され、終盤で52の祖母から示される社会的な仕組みとして現れ、貴湖と52のこれからを定める存在となっている。

第一の見方とは、語られない痛みという経験への共感を読者（オーディエンス）の願望を映すので、作品が読者自身の内面を表現するように受け入れられる。すると第二の見方は、その痛みへの向き合いかたについて作家や読者の思いと異なる。すなわち解決という社会的な対応ではなく、作家は物語ることで、読者は物語られることで思いを満たされる関係を得られる。これをStockがtextual community と呼ぶ関係ととらえるとき、文芸作品が経験への共感をゆるやかに結びつめるメディアとして機能すると考えるのは、決して誇張ではないだろう（Stock (1983); Stock (1990)）。ここには、感情を共有できる等身大の関わりを求める当事者と、その人間関係への解釈枠組みが見出されている<sup>(9)</sup>。そのとき、地域相談システムはケアを要する状態へ向き合うための選択肢の一つにすぎないことも示すことになる。

あらためて本作品を振り返っておく。もしも母親から愛されていたら、貴湖はALSになった義父のヤングケアラーという役割を担うことに安住していたかもしれない。だがそんな貴湖を美晴がみつけ、アンさんが背中を押すことで貴湖自らが違う生き方を選んでいくことにつながった。語れなくなっていた貴湖の痛みを受け入れ、彼女の変化を促したのは、地域相談システムのような、あるいはインフォーマルな支えと平板化する関係でもなく、貴湖を理解しようとする実存的な関係だった。

日常性の尊重を標榜する専門的な支援やそのシステムは、主人公たちの日常における苦しみへの対策にはなりえても、手段的意図の故に本当の痛みを理解できない。逆にこの作品が、日常における痛みを感じる人びとにとって望まれる家族と地域社会の重要性を提示するイロニーとなっているのである。

## おわりに

2019年末から世界的感染の始まったCOVID19の感染予防のため、社会経済活動が制限される中で、さまざまな相談事業の対応する家庭内暴力や児童虐待が深刻化したとされる。またこれまでと異なる年代の自殺者も増加するなか、直接関わりをもったり居場所を得たりしてきた中で満たされてきたものに及んだが、同様に従来の社会的な支援も同様に活動に支障が出ている。

ケアや何らかの保護を必要とする状況が拡大するとしても、それを全て社会的な支援によって政治的に解決することはできない。できないとしても一旦社会的課題としてとらえられた時、ケア等を要する状況への対処を制度化しようとする福祉化は進むだろう。菅義偉前内閣は、内閣府に孤独対策担当大臣を置き、ワーキングチームによる検討を進めているが、これも地域社会や一般市民の参加を前提にした方向での対策となっていくだろう。だが、周囲に語ることにできない自らの痛みは、人びと自身が共感する関係のなかで主体的な営みからしかつかむことはできない。作品によって表徴され、共有される感覚に過度な期待を抱くことは難しいかもしれないとしても、小川公代のいうようにコロナ禍を生きる私たちにとってケアは不可欠なものであり（小川2021）、そのケアはすべて制度にならないものであるということを前提とした認識に立つ必要がある。

## 註記

- 1) たとえば2000（平成12）年制定の児童虐待防止法は6条で「児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者」へ通告する義務を設けた。その後制定された高齢者虐待防止法（2005（平成17）年制定）や障害者虐待防止法（2011（平成23）年）は国民の義務（ただし努力義務）として通告を義務付けている。
- 2) また、これら専門的な相談を中心に、幅広いさまざまな生活上の相談に応じる総合的な相談支援体制が市町村で整備されるようになった。社会福祉法人による社会貢献事業や隣保館における総合生活相談の再評価などがこれにあたる。
- 3) 新型コロナウィルスの感染予防で経済的影響を受けた人びとを対象とする緊急貸付の相談受付が、おおむね市町村の社会福祉協議会に設けられた。従来は生活福祉資金貸付をおこなっているのであるが、こちら

の対象はおおむね固定的で限定されていたため、初めて「そうでない人々」が窓口を訪れたことの反応と推測される

- 4) 専門職に対する様々な批判があるが、社会福祉の支援モデルとは支援に携わる専門職が訓練され身につける考え方で、基本的に対象者の問題を解決するために目標を設定して具体的手立てを計画的に実施する形をとる。これを、ゴッフマンがいう解釈枠組みの一つと考えてみると、専門職が他者を見る経験はおのずと固定化されると考えられる。
- 5) 相談支援システムを説明するソーシャルワークでは、対象となる人びとの人的関係をエコロジカルなものにとらえる。そして制度を通して関わる人びとの関係をフォーマルな関係、それ以外をインフォーマルな関係と分けている。
- 6) 「兵士の報酬」はフォークナーの初期の作品である。第一次世界大戦で出征し顔の大けがと記憶を失ってしまった主人公のドナルドが帰郷するが、郷里の南部はかれを英雄とほめそやす一方、顔の大けがを見世物のようにとらえたり、元恋人との別れを話題にしたりする。またかれの父も嘆きはするものの、親身になってドナルドの状況に向かい合うことはない。ドナルドを本当に心配しているのは、戦地から戻ってくる道で出会った帰還兵のジョーと、夫が戦死した未亡人のマーガレットである。
- 7) クラインマンらは「苦しむものを孤立させて彼らから文化的資源、とくに言語資源を奪うこと」と説明する（クラインマン・クラインマン（2011）vii）。
- 8) この傾向について、クラインマンらは支援の制度化は逆に苦しみが増すことを問題視する（クラインマン・クラインマン（2011）vii）。
- 9) 作家自身もいじめ被害の経験があったことをインタビューで語っている（朝日新聞2021年8月23日）。

#### 参考文献・論文・ウェブサイト

- ・ Arthur Kleinman, Veena Das, Margaret Lock eds., Social Suffering, University of California Press, 1997  
（＝坂川雅子訳（2011）『他者の苦しみへの責任』みすず書房）
- ・ 朝日新聞2021年8月23日「#withyou 世界は簡単に変えられる」
- ・ 大橋健三郎（1993）『フォークナー』中央公論社〔中公新書〕
- ・ 小川公代（2021）『ケアの倫理とエンパワメント』講談社
- ・ 加島祥造訳、フォークナー「兵士の報酬」（加島祥造・大橋健三郎・龍口直太郎訳『世界文学41フォークナーI』新潮社、1971、5-263頁）
- ・ Brian Stock (1983) The Implications of Literacy, Princeton University Press
- ・ Brian Stock (1990) Listening for the text, The John Hopkins University Press
- ・ 古川隆司（2009）「犯罪者の孤独と生活世界—吉村昭『仮釈放』をめぐる一—」追手門学院大学社会学部紀要3号、151-158頁
- ・ 古川隆司（2010）「犯罪者のライフコース観」追手門学院大学社会学部紀要4号、73-83頁
- ・ 町田その子（2021）『52ヘルツのクジラ』中央公論新社